

# 韓国における日本まんが受容の論理

山中千恵

(大阪大学大学院)

## はじめに

電車の中で、夢中になってマンガ<sup>(1)</sup>を読んでいる男子大学生がいる。マンガの絵柄から判断すると『MONSTER』を読んでいるらしい。ふきだしの台詞にはハングルがおどる。ソウルの地下鉄でこんな風景に出会うことは、そうめずらしいことではなくなった。

『MONSTER』は日本で大人気の青年マンガである。韓国では長い間、日本のものを受容すること自体、あまり好ましい行為ではなかった。人々は、受容することにどこか「うしろめたさ」さえ感じていたのではないだろうか。しかし、地下鉄の中で堂々と「日本まんが」を読む大学生の横顔に、「うしろめたさ」は読み取れない。

彼や、彼のような人々は、こうした「うしろめたさ」とのよう折り合いをつけてきたのだろう。素朴な疑問がうかぶ。

そこで、本論文では、こうした疑問を出発点として、99年に行なったインタビュー調査<sup>(2)</sup>をもとに、韓国において、日本まんがを読むという行為（「日本まんが受容行為」とする）が、どのような論理をもって、説明されているのかを確かめてみようと思う。そして、こうした論理が、どのような文脈に基づいているのかを分析し、その上で、今後の日本大衆文化の受容分析に必要な視点を指摘したいと考える。ただし、今回の議論では、枚数の関係上、説明の「論理」を通じて、行為がどのように「意味付けられていくのか」という問題には深く立ち入らないことにする。

## 1. 「マンファ」の中に「まんが」が発見されるまで

「日本まんが受容行為」が、どのような論理を持

って意味付けされていったのかを問う前に、まず、韓国における日本「まんが」と韓国の「マンファ」とはどのようなものなのかを確認しておきたい。

現代のマンガにつらなる「ストーリーマンガのはじまり」を考えた場合、1900年初旬にその兆しがあり、解放後の48年前後には子供向け雑誌が復刊され、ストーリーマンガ市場が子供をターゲットとして形成され始めたといわれている<sup>(3)</sup>。

50年代末には、マンガのレンタルショップとマンガ喫茶が合わさった施設、マンガ房が登場した。マンガ房には、一般販売していない、薄っぺらなマンガ房専用の「マンファ」単行本が毎日のように発行され、並べられた。韓国では、長く、マンガは買わずに借りて読むものだった。

しかし「マンファ」には、日本まんがの海賊版も含まれていた。日韓の国交回復は1965年。日本大衆文化開放は、1998年のことである。韓国では、「日本」のまんがを出版することは、海賊版を発行すること以上に、社会的な問題になる。そのため、日本まんがは、韓国人作家により写し描きされるなど、手が増えられ、日本的な部分は修正され、韓国人作家の作品として出版された。韓国で読まれているマンガは、すべて「マンファ」でなければならなかった。

70年代から80年代、「マンファ」は、マンガ房を中心とし、「まんが」をその内部に取り込みながら自らを形成していった<sup>(4)</sup>。

しかし、実際、多くの人々が「マンファ」に注目することになったのは、民主化以降、80年代末からの、日本まんがの急激な流入のためであった。大量に流入した「まんが」は、それまでのような「マンファ」への取り込みが十分におこなえなかった。「まんが」は、「日本の物」と意識され

ながら市場を席卷したのである<sup>(5)</sup>。

文化体育部がまとめた資料によれば、「マンガは昔から、日本のマンガの海賊版が多く、低俗なものであったため、マンガの社会的地位は低くなった」という見方もある（文化体育部、1997）。しかし、実は、「日本」と「低俗なマンガ」という考えが急速に結び付けられ、一般的な力をもちはじめたのは、80年代末以降の「まんが」の大量流入が大きく影響している<sup>(6)</sup>。

それまでも、日本マンガの海賊版が「マンガ」としてマンガ房で「借りて」読まれていたことは上でも述べた。しかし、このとき人気を博した『ドラゴンボール』や『スラムダンク』は、さまざまな種類の海賊版単行本として出版され、子供たちに「購入」された。

親は、このとき初めて、子供の机の上に、かばんの中に、新聞でとりあげられていた、問題の「日本まんが」を発見することになる。

## 2. 反日マンガ論の登場

「マンガ」は、「日本」という要素が前面に押し出されることによって、マンガを読まない人々からも注目されるようになった。韓国社会では、「日本」文化を受容すること自体が問題になりうる。そのため、90年代に入ってから、それまで以上に「日本」マンガの流入が進む状況を、日本大衆文化受容の問題として、再解釈・説明していく必要性が増した。

「日本漫画の韓国攻略はすでに危険な水準に達している。忙しい日常に追われている間にわれわれの子供たちは性と残忍さを本質とする日本の漫画に中毒をおこし、自らも知らぬ間に破滅的に従属してしまった。(中略)日本漫画進出のさきがけを果たした『ドラゴンボール』の場面をみると、性と暴力という日本文化の特性をそのまま表している。(中略)日本漫画は暴力に対する寛容的態度をみせ、これは児童漫画にそのまま溶け込んでいる」(『朝鮮日報』1991年5月11日)

上の記事は、典型的な「反日」の例として、野平俊水の著書『韓国・反日小説の書き方』に取り上げられたものである。野平の指摘によると、日本について批判的に書かれた「反日書」は、いくつかの共通した「要件」を備えており、残忍さや性の問題というアイコンはその1つであるという(野平、1996)。この記事にも、「まんが」の残忍さや性の問題というアイコンがうめこまれており、反日マンガ論として成り立っているといえる。このようにして、日本マンガの受容行為は、反日マンガ論の観点から批判され、「日本文化＝よくないもの」として、反日感情全般と結びつけられていった。

90年代前半、こうした意味付けには、メディアはもちろん、マンガのテキスト分析や、子供たちへの影響調査などの「科学」も加担して、「日本文化を反映した低俗なまんが」というイメージを作り上げていった。

そして、不幸なことに、反日マンガ論の勢いによって、韓国の「マンガ」自体も貶められていった。

たとえば、韓国の新聞、中央日報の記事検索結果をみると、特に90年から95年頃までは、「韓国のマンガ」を検索しているにもかかわらず、記事の主題が「日本まんがの悪影響」である場合が多い。反日マンガ論は、いつのまにか「マンガは暴力的で煽情的な低俗なもの」というイメージのもと、「マンガ」と「まんが」をひとくくりにしてしまったのである。

それを象徴するように、97年の青少年保護法導入時には、マンガに対する大幅な規制がもうけられ、それに反対した韓国の青年向け「マンガ」の作者たちが、「わいせつ物配布」などの罪に問われるという騒動も起こった。「暴力的で煽情的」と見なされるマンガは、「日本まんが」にとどまらなくなっていたのである。

## 3. 読み手達の反論

反日マンガ論には、文化帝国主義論<sup>(7)</sup>の側面もある。文化帝国主義論の問題の1つに、メディアの受け手を無批判な受容者と見なすことがある。

反日マンガ論への対抗意見は、無批判な受容者とみなされたマンガの読み手のなかに生じた。以下では、99年に行なったインタビュー結果から、反日マンガ論への批判ととれる意見を見てみよう。

「(「まんが」が、読む人に悪い) 影響を与えるから、禁じるというのはよくない。人々が、いいことと、わるいことを区別できればいいんでしょ。個人の問題だと思う。(中略)(でも) 悪影響、いい影響というのは、個人的なものだから(国家には) わかんないでしょ。」(20歳・大学生・女性)

これは、マンガの読み手である大学生の意見である。反日マンガ論の議論の中では、マンガの読み手が、語り手として登場することはなかった。マスコミの展開した反日マンガ論の中のマンガの読み手は、「操作される」人々でなくてはいけなかった。しかし、彼女には、マンガの読み手である自分は、よいものと悪いものを判断できる主体なのだという自負がある。

「マンガにはいろんな種類があるのに大人達はそれを知らない。だから子供が見るモノで幼稚だと思ってるとおもう。今は少し変わってきてるけど、そういう考えがまだある。」(21歳・大学生・女性)

反日マンガ論が仮定していた読み手は、「子供」である。大学生は含まれない。大学生であるマンガの読み手は、自分たちは「子供」ではないのだと感じ、「大人たち(既成世代)」のマンガに対する無理解に反発を覚え、マンガを擁護したいと感じている。

「一般的にマンガを好きだというと、韓国のモノも日本のものも好きってことになるので、日本のまんがも必然的にたくさん読むことになりました。」(21歳・大学生・女性)

子供でもなく、大人でもない場所に置かれた彼らは、日本まんがが受容行為を、反日的な論理から、

「日本文化=よくないもの」という図式で意味付けてはいない。しかし、彼らの言葉の中には、反・反日にあたるだろう、「日本文化=良いもの」という図式も、みあたらない。むしろ、反日的な論理が導く意味付けから逃れようと、「マンガ(マンファ)がすき。日本は関係ない」とする「ずらし」を用いて、脱反日的な論理を展開し、異なった意味を生み出そうとしているのである。

以上のことから、日本まんがの受容行為を意味付ける論理には、一般的意見として、反日的なものが、読み手の意見として、脱反日的なものが存在することが確認できる。

#### 4. もう1組の論理

反日的な論理と脱反日的な論理のように、日本まんがの受容行為を巡る、アンビバレントな論理が存在することは、今に始まったことではないのかもしれない。しかし、マンガの読み手の論理には、「反日」をめぐるアンビバレントさにとどまらないものがあるように思われる。

たとえば、脱反日の論理で「一般的にマンガを好きだというと、韓国のモノも日本のものも好きってことになる」と言った大学生の意見には、「マンファ」と「まんが」はひとつのメディア・文化であり、そこでは「韓国」も「日本」も関係ないのだという「共通性」の強調が論理に含まれている。これによって、日本まんがが受容行為は、日韓両国の共通感覚を示すものとしても意味付けられている。

さらに、以下の意見にも、反日や、脱反日だけではない論理が存在する。

「(韓国マンファの独特の魅力とは) パワーだ。日本のまんがとは全然違う。(中略) 日本の物に(パワー)はない。」(30歳・会社員・男性)

これだけ読めば、韓国人の、日本に対する対抗心に燃えた「克日」的意見だと思うかもしれない。しかし、彼は続けて次のように述べる。

「(韓国少女マンガに現れた歴史観、民衆観と

いうのは自分たち) 386 世代が深くコミットしたものだ。自分達が一番悩んだこと。自分にとって大きな問題だったこと。それがパワーとして現れている。(中略) 感動をもとめて、日本の少女まんがをたくさん読んだが、(韓国マンガのような感動には) めぐりあえなかった。(同上)

彼は、まんがとマンガを「対比」して、「反日論」や「克日論」が依拠するような、道徳的優劣を競おうとしているのではない。むしろ、ふたつを「並列」し、その間の違いに注目している。

こうした読み手は、日本マンガの受容行為を通じて、マンガの文化背景になっている韓国と日本という社会の「差異」を確認している。その差異に基づいて、韓国マンガが自分にとって固有性を有するものなのだと意味付けられる。

以上のことから、脱反日的な論理を展開する読み手の中には、日本まんがと韓国マンガの「共通性」を強調していくような論理の展開のしかたと、「差異」を強調していくような方法があるということが見えてくるのである。

## 5. 「世界化」がもたらしたもの

今回のインタビュー結果からは、日本まんがが受容行為に対する論理は、反日か脱反日かという軸と、それとは別に、共通性の強調か差異の強調かという軸によって分類が成り立つことがわかった。

しかし、反日という論理は、「差異」の強調や本質化をともなった論理であり、反日を否定する(日本を認める)論理は、日本との「共通性」や同質化を容認することにつながっていたのではなかったかという疑問も生じる。つまり、「差異」を強調する反日と、「共通性」を強調する脱反日、という対立軸を考えれば、従来のほとんどの意見は分類できたのではなかったのだろうか。これらになぜズレが生じたのだろうか。

本田は、「90年代に入るところから、韓国の流行は多様化し、かつ外国のそれに素早く対応する形で生まれては消えるようになった。大衆文化のグローバル化から韓国社会も、もはや逃れられなく

なった」(本田、1997、272頁)と民主化以後の韓国社会を位置付けている。

90年代の韓国においてグローバル化は、まず「世界化」というスローガンとしてとらえられた。「世界化」は単一の世界市場をイメージし、経済のグローバル化を強調するものだった。韓国的な意味として、世界化は「『文化の競争』と位置付け」られた(小倉、1998、211頁)。

しかし、「世界化」の掛け声は、競争という意味だけではなく、人々の「グローバルなものが文化的地平としての存在感を強め、その中で自分たちが生活を形作っているという」(Tomlinson、1999=2000、61頁) 感覚も強めただろう。それに伴って、大衆文化も、グローバルにつながっている文化の1つとして、日常生活の中でとらえられるようになっていったのではないだろうか。

では、こうした「グローバルなもの」は、人々にどのようにイメージされたのだろうか。トムリンソンは、今日我々が、「グローバル性という概念を、あきらかに『双神ヤヌスの顔をもつ』ものとして受け止めているという」(Tomlinson、1999=2000、138頁)。日本まんが受容行為を意味付ける論理も、「双神ヤヌスの顔」として考えるとすっきりする。

トムリンソンは、双神ヤヌスを、「一方の顔には、(われわれの『共通の人間性』を認識するための)『単一の世界』を作り出すと言う魅力があり、「もう一方の顔には、文化の『均質化』に対する恐れ」があるものとしている(Tomlinson、1999=2000、138頁)。これに従えば、「共通性」を強調したマンガ読者たちには、マンガという大衆文化のグローバル性を、魅力としてとらえる意識があり、逆に、日本まんがの流入や受容をめぐる反日マンガ論の背景には、反日感情だけではなく、大衆文化のグローバル性を、均質化への危機感とうけとめるような、人々の意識がある。また、そのような意識は、文化の「差異」や、ローカルな固有性を強調してゆくことにつながると考えられるので、「差異」を強調する読み手も、この意識を共有するものと考えられる。

90年代以降の韓国において、「世界」やグローバル性をどうイメージするかということが、日本

まんがの受容行為の論理にとって、重要になってきている。このイメージに基づいて「共通性」と「差異」の論理があらわれてきたのである。一方、「反日論」は、韓国のローカルな歴史や生活、教育に根ざした論理である。そのため、反日と脱反日、共通性の強調と差異の強調という軸は、一組の対立軸とはなりえず、ズレを生じたと考えられる。

## 6. 経済と結びつくマンガ

「世界化」のスローガンは、マンガの読み手だけではなく、政府や出版社にもグローバル性を意識させた。

政府は、「現代社会の情報化や高度化に、マンガは対応できる。マンガは単純な娯楽や趣味ではなく、高付加価値産品である」(出版政策資料集、1995)とマンガをとらえ、「キャラクターデザイン、ゲーム、テーマパーク、ファンシー商品、アニメーションの各産業の発展を左右するメディア(文化体育部、1997)」と位置付けて、文化産業の発展の鍵を握る商品であると考えようになった。

反日マンガ論のような、文化帝国主義論の送り手中心の発想は、送り手の力を過大評価し、結果として支配を裏書してしまう可能性を持っているという指摘がある(姜・吉見、2001、28頁)。政府のマンガへの急激な対応の変化の背景には、「まんが」大量流入の脅威を強調した結果、日本まんがの産業力が過剰評価されたということがあるかもしれない。もちろん、韓国のマンガ市場が、日本まんがの流入によって、ある程度の規模に達したことも関係しているだろう。

インタビューによると、出版社や政府の担当者は、アジア諸国への「マンガ」輸出を試みながら、「現在の韓国の作家は、日本まんがを見て育ったために、絵が日本まんがに似ている。しかし、日本まんがとの差異が少ないからこそ東南アジア諸国にも進出しやすいのではないかと」韓国の「マンガ」を分析している。分析には、反日マンガ論の片鱗はみられない。むしろ、日本まんが受容行為の意味付けに、「共通性」をみいだす論理が使われている。

一方で、彼らは、マンガを輸出していく過程で「市場性をもたせつつ、韓国らしさを出していけたら……」と考えることもあるという。これは、「差異」を強調するような論理を利用したものである。

このように、マンガの読み手が日本まんが受容行為を意味付けるさいに使っていた論理は、政府や出版社にも使われるようになってきた。しかし、その論理が「生み出す意味」は、読み手達のそれとは微妙に異なっているだろう。

読み手達の中の、「共通性」の強調と「差異」の強調という論理の分裂は、彼らの依拠するアイデンティティの問題ともかかわっている。前者は「若者」というアイデンティティであり、後者は「マニア」というアイデンティティと関わっているようにおもわれる<sup>(8)</sup>。

今後、マンガの読み手の論理が、マンガ産業の論理や経済の論理とつなげられていく中で、彼らのアイデンティティは変化していくだろう。さらには、「韓国人」というアイデンティティと、今までとは異なる形で接続される可能性もある。

論理が生み出す意味とアイデンティティの問題を、今後、さらに問う必要がある。

## おわりにかえて

日本まんが受容行為を意味付ける論理として、反日マンガ論があり、それに対抗するかたちで脱反日的な受容の論理があった。さらに、脱反日的な論理の中にも、日韓マンガの「共通性」を強調するものと、「差異」を強調するものがあった。しかし、「差異」を強調するような論理は、反日マンガ論の中にも含まれていた。

論理の展開が、反日的か、脱反日的かという問題は、韓国では日本をどうイメージするのかという、韓国社会がこれまで抱えてきた問題にかかわっている。「共通」を強調するのか、「差異」を強調するのかは、論理を展開する人が、グローバル性をどうイメージするかにかかる問題である。選択の背景が異なっているこれらの論理は、以上の結果を見る限り、二つの軸となり、一点で交わって、四象限を作り出していると考えられるのでは

ないだろうか。

このことから、これから韓国のなかの日本大衆文化を分析していく上では、人々の、グローバル性にたいするイメージや、実際に起こっている文化のグローバル化に、いっそう注意を向ける必要がある事がわかる。

しかし、このようにまとめると、反日的でありながら、「共通性」を強調するような論理はないのかという疑問がでてくる。それとも、もはや、日本まんが受容行為を、反日論をもって説明するような、ローカルな論理は消滅した（しつつある）という結論を付け加えるべきなのだろうか。

近年の研究には、日本大衆文化受容が進む状況を指して「今の韓国の若者達は、文化は文化として扱い、政治は政治として考え、両者を区分して使い分けるほど成長している（朴、2002、10頁）」と結論づけるものもある。つまり、韓国における日本大衆文化の受容を研究する上では、反日論（「政治？」）を考慮する必要性はなくなりつつあると言う事だろうか。

しかし、2000年に行なったインタビュー<sup>(9)</sup>調査の結果の中に、次のような意見がある。

「日本のアニメやまんがには共感します。『となりのトトロ』では泣きました。しかし、『ぼたの墓』や『はだしのゲン』はいけな。戦争中の日本人に共感してしまうことで、歴史教育との矛盾を感じるでしょう？ われわれが団結できなくなる」（29歳・教師・男性）

この意見は、日本まんが（アニメ）の受容行為を、メディアの「共通性」を強調しながらも、反日的意見として説明している。以前の反日マンガ論と異なって、彼は、日本まんが自体に本質的な問題があるとは言っていない。しかし、グローバルな大衆文化の受容によって、歴史に結びついた反日感情が失われることへの危機を感じている。

こうした意見がどの程度共有されているのかを知ることは、今後の課題となる。しかし、この意見から、反日的な論理さえも、グローバル化をへた「ローカルな論理」となっていくの难道うという予想はできる。

ホールは、グローバルに広がる大衆文化の特徴として、「特殊な形の均質化」をあげ、グローバルな大衆文化は、ローカルな差異を通じて広がっていくものであるとしている（King, 1997=1999）。そうであるならば、今後とも、韓国における日本大衆文化の分析において、反日感情という、韓国のローカルな文脈を切り捨てるのは得策ではないように思える。むしろ、グローバルな大衆文化の分析に、どのように利用していけるのかを問うて行く必要があるだろう。

今後の研究においては、大衆文化の分析から、反日感情の解消を強調し、日韓関係の明るい未来図を安易に結論するのではなく、大衆文化の中で日韓関係が作り出されていく過程こそが、分析されていくべきなのである。

- (1) 本論では、一般的な意味でマンガを記述する場合には「マンガ」とカタカナで表記し、「日本」マンガという意味を持たせる場合には「まんが」を、「韓国」マンガという意味では「マンファ」を用いた。
- (2) 1999年3月と8月に、マンガ読者、編集者、新聞記者、政府関係者等30人に約1時間ずつ行なった。
- (3) 韓国のマンガの歴史をまとめた孫相翼の議論や、SICAF（ソウル国際アニメーションフェスティバル）の図録では、こうした考え方が共有されている。
- (4) 韓国「マンファ」が韓国社会において、どのように形成されていったかはYamanaka, 2002を参照。
- (5) 韓国には、70年代に「マンファ」として読まれていた（あるいは自分も読んだ）『キャンディキャンディ』が日本まんがであることは知らなくても、80年代末から流入した『ドラゴンボール』が、日本のまんがであるとわかっている人は多い。
- (6) マンファと日本イメージが結びついていく過程については、山中（2001）を参照。
- (7) 「中心的主張として、ある支配的文化が、その他のもっと脆い文化を圧倒してしまう恐れがある」（Tomlinson, 1999=2000）と考えるような議論。
- (8) マンガの読書量や所有の有無を見ると、「共通性」を強調する読み手のマンガ読書量や所有量は少なく、「差異」を強調する読み手は相当量のマンガを読み、所有していたという違いがあった。もちろん、学歴や年齢差の問題も検討する必要がある。
- (9) 2000年7月に、中学、高校教師を対象に実施。

#### <参考文献>

本田洋（1997）『外来文化の受容と消費生活』『もっと知り

- たい韓国2』弘文堂。
- 姜尚中・吉見俊哉 (2001) 『グローバル化の遠近法』岩波書店。
- King, A. D., (1997) *Culture, globalization and the World-system; State University of New York at Binghamton* (=A・D・キング編 (1999) 『文化とグローバル化』山中弘・安藤充・保呂篤彦訳、玉川大学出版部)。
- 野平俊水 (1996) 『韓国・反日小説の書き方』亜紀書房。
- 小倉紀蔵 (1998) 『韓国は一個の哲学である』講談社現代新書。
- 朴順愛・土屋礼子編著 (2002) 『日本大衆文化と日韓関係』三元社。
- Tomlinson, J., (1999) *Globalization and culture*, Cambridge; Polity Press (= 『グローバリゼーション』(2000) 片岡信訳、青土社)。
- 山中千恵 (2001) 「韓国マンガにおける日本の位置付け——日本マンガの受容史」『年報人間科学』第22号、125—142頁。
- (韓国語)
- 文化体育部 (1995) 『出版政策資料集』。
- 文化体育部 (1997) 『出版マンガ政策法案』。
- (ドイツ語)
- Yamanaka Chie (2002) *Manwha Comics in der Republik Korea, LEXIKON DER COMICS, Teil 1: Themen Meitingen: Corian-Verlag Heinrich Wimmer, 41. Erg.-Lfg.*